

## 桐城馬氏宗族の文学活動に関する一考察

### ——文化宗族現象を視野に——

郎 潔

#### 一 序言

安徽省の南部に位置する桐城は、県という小さい行政区画でありながらも、明・清時代に、二百四十人近くの進士、七百八十人前後の挙人を輩出した。天下に名を馳せ、中国文学史において最も影響力を持つ文学流派の一つといっても過言ではない桐城派も、ここに源を発し、多くの歴史的文化的名人を出している。歴史上、桐城は「文章は天下に甲たり、冠蓋は京華に満つ」と言われるほど栄えていた。この桐城文化の繁栄を語るには、桐城を舞台に活躍していたいくつかの文化宗族の役割を抜きに語ることはできない。戴名世を育てた戴氏宗族、「父子宰相」として名高い張英と張廷玉を誇る張氏宗族、方以智、方苞を始めとする人材を輩出し、梁実秋に曲阜孔氏につぎ天下第二の文化名門と称えられた桐城（桂林）方氏、所謂「桐城派三祖」の一人である姚鼐を代表とする桐城（麻溪）姚氏宗族、又、本論が研究対象とする、晩期の桐城派を束ねる馬其昶など多くの人材を育てあげた桐城（扶風）馬氏宗族等、それらの文化宗族の参加は桐城文学の成立及びその後の発展に大きく貢献し、一方で、桐城派の流れを汲み、その成長の波に乗って宗族文学を華々しく開花させた一面もある。宗族文学と地域文学に関する研究は、近年になって、ますます多くの関心を集めている。筆者が本論の検討の焦点を桐城のある文学宗族に絞った理由の一つは、宗族文学と地域文学

との二つの視点から、具体的な事例分析を通じて、文化宗族の育む環境と地域文化における影響力に注目することである。本論は、筆者が今執筆中の論文『宗族と文学——明・清文化宗族現象の検討』（仮題）の事例分析の一部として、宗族と文学との関係の理論的な展開に問題提起と実例による裏づけを提供したい。

## 二 桐城馬氏宗族の由来とその家族史

桐城馬氏宗族の始祖——趙驥という人物は、廬郡六安州の出身で、明の永楽年間、婿入りで桐城のある馬姓の家に入ってきた。永楽年間という時期は、桐城にとつて、実は大変興味深い年である。明清時代に夥しい数の進士を出した桐城だが、実は、唐、宋、元の長い歳月にわたり、科挙試験に合格して、進士となったのは、僅か十人しかいなかった。しかし、明代の永楽二年（西暦一四〇四年）、劉瑩が科挙に合格し、進士になったのを皮切りに、桐城出身の知識人たちは次から次へと狭き「龍門」へ登り、仕途を辿ることになった。桐城馬氏宗族の学問を重視する傾向は、劉瑩等知識人の出世に刺激を受けたことによるかどうかは、一言では言えないが、桐城馬氏宗族が科挙の道を選び、学問によりその生涯を託した子弟が早くも現れたことは、桐城馬氏の族譜から分かる。例えば、第四世の馬駢は「少耽経籍、粹然以儒者自居（幼いころから経籍に耽、純正で儒者をもって自ら任ずる）<sup>1</sup>」、第五世の馬信延は「奉庭訓、勵志力学、博覽書史、而屢試不遇、隱居以終。用所得教諸子、為学甚勤（家庭の教育を受け、学習に励み、書史を博覧したが、しばしば科挙に落第し、隱居して余生を送った。習ったものを子息に教え、学問については甚だ勤勉である）<sup>2</sup>」。後者の記録からは、馬氏宗族の家庭教育への取り込みが窺える。

馬氏宗族の興起は第六世の馬孟禎により幕を開けた。馬孟禎、字は泰符、明万曆二十六年（西暦一五九八年）に進士となり、天啓初年に太僕寺少卿まで昇進し、直諫愛民として、その事跡は『明史』に残されている。<sup>4</sup>馬孟禎を先頭に、馬氏一族は経学、文学等において多士濟々で、特に七世八世の子弟を中心に馬氏の「怡園」という場所で頻繁に

開かれていた詩文酒会では、馬懋勳、馬懋学、馬懋德、馬懋賛、馬之瑜、馬之瑛の六人は当時「怡園六子」と称えられ、その盛名は広く知れ渡っていた。馬之瑛<sup>5)</sup>(字は倩若)は崇禎十三年(西暦一六四〇年)に進士に及第した。

しかし、怡園の詩文酒会の盛況は長くは続かなかつた。明末には桐城も激動の時局に巻き込まれるようになったからである。崇禎十五年(西暦一六四二年)、馬氏宗族の八世の馬之球、馬之瑚、馬達の三人は張獻忠部隊に捕らえられ、「不屈」であつたが故、殺害された。「怡園六子」の一人の馬懋賛とその弟の馬懋修は弘光元年(西暦一六四五年)に左良玉の叛乱軍に捕らえられ、敢えて「不屈死之(屈せずして亡くなる)」の道を選んだ。

一方、激動の時勢に自ら身を投じる勇敢な者も多く現れた。例えば、七世の馬懋功は南明の福王の弘光政權と唐王の隆武政權に仕え、順治三年(西暦一六四六年)清軍との戦いに敗れ、川に身を投じて明王朝に忠誠を尽くした。八世の馬之琛は唐王の隆武政權に従う道を選んだ。隆武政權の陥落後、馬之琛と、その父親である「怡園六子」の第一人者と称えられる馬懋勳、及びその弟の三人は行方不明となつた。九世の馬永思は福王の弘光政權と桂王の永曆政權に仕え、永曆政權陥落後も、柳慶山谷に身を隠し、最期まで力を尽くし抵抗した。

やがて新王朝の統治基盤が次第に固まつてきたが、「怡園六子」の馬之瑜は、やはり布衣の道を選び、新王朝に協力しない態度を貫いた。同じ「怡園六子」の一人である馬之瑛は出仕の道を辿り、明清の政權交替の混乱中大打撃を受けていた馬氏宗族に復興の兆しを齎した。馬之瑛には馬敬思、馬孝思、馬繼融、馬教思、馬日思、馬方思の六人の息子がいる。皆秀逸な人材であるが、特に四男の馬教思は康熙十八年(西暦一六七九年)の会試を首席で及第し、所謂「会元」として、「翰林院庶吉士」に任用された。

文字獄の陰で喘ぐ桐城戴氏、海寧查氏等の宗族と比較すると、桐城馬氏宗族の清王朝での経歴は基本的に平坦なものと言えよう。挙子業を修める数多くの宗族子弟から、十四世の馬宗璉は嘉慶六年(西暦一八〇一年)、十五世の馬瑞辰は嘉慶十年(西暦一八〇五年)、十四世の馬伯樂は嘉慶二十二年(西暦一八一七年)、十三世の馬維璜は嘉慶

二十五年（西曆一八二〇年）の会試にそれぞれ合格し進士になり、馬伯樂、馬瑞辰は翰林院庶吉士の登用も果たした。その外に、馬樸臣は雍正十年（西曆一七三二年）、馬濂は乾隆十二年（西曆一七四七年）、馬勗は乾隆三十九年（西曆一七七四年）、馬梁は嘉慶十八年（西曆一八一三年）、馬昌黎は光緒十四年（西曆一八八八年）の郷試に合格して挙人となった。

科挙としての成功は桐城馬氏宗族を地方の有力宗族に押し上げた大きな理由である。魏晉南北朝時代の門閥士族と違い、明清時代の世家望族の多くは、科挙で勝ち上がれる優秀な人材を立て続けに輩出することによって宗族の地位や声望が維持される。そのため、子弟の教育に力を尽くすことは当然のことである。時代が変わっても、世代が変わっても、馬氏宗族は絶えず科挙人材を供給できていることから、宗族の科挙人材層の厚さと、それを支える宗族の全体的な教育環境の持続性と安定性を物語っている。

### 三 桐城馬氏と桐城派

科挙での成功だけが宗族を文化宗族に導くとは限らない。文化宗族の成立には、家学が担う役割は大きい。

実は、馬氏宗族がたとえ科挙に成功したと言っても、六代続けて十二人も翰林院入りした桐城張氏との差は歴然としている。馬氏宗族は、張氏、方氏、姚氏、左氏と並んで桐城の「五大世家」の一つとして称えられている理由は、科挙における成功だけでは済ませられない理由がある。馬其祖は『桐城耆旧傳』で馬氏宗族について、こう語っている：

吾族丁単、且無大官顯秩、然縣人皆推其族望與方姚張左並。蓋自太僕起家為名臣、厥後以清白世守、文儒忠義之彦、往往而有也。

吾が一族は人が少なく、しかも高官顯爵を出したわけでもない。然し、県人は皆吾が一族の声望を方、姚、張、左と並ぶべきものと推しあがめる。それは、太僕（馬孟禎）が家を興し、名臣となつてから、吾が一族は清白をもつて代々と守り、文儒、忠義の英才が続々と現れたからである。

「忠義之彦」については、おそらく前文家族史に挙げている馬之球等のことを指しているであろう。ここでは桐城馬氏宗族の「文儒」「之彦」について、少し詳しく考察してみたい。

第五世の馬信延は自らの一族について、「吾家世服膺儒訓（我が一族は世代儒家の教えを守り従っている）」と述べ、儒を尊び、經を重んじる姿勢は、族譜に記録された馬氏宗族の多くの成員に見られる。又、その方面の学術的成就も多い。例えば、馬懋學の『下学編』、馬教思の『左傳紀事本末』、馬翻飛の『讀易録』、馬春生の『群經擇意』、馬宗璉の『左傳補註』、『毛鄭詩訓詁考証』、『周禮鄭注疏証』、馬瑞辰の『毛詩傳箋通釋』、馬其昶の『毛詩学』、『三經誼詁』などが族譜に記録されている。特に馬宗璉の『左傳補註』は顧炎武と惠棟の補注と比肩できるものと当時の人々から高い評価を受けていた。

族譜に残る多くの記録から、桐城馬氏宗族が家学として重んじているのは宋儒の学であることが分かる。例えば、七世の馬懋學は「潜思傳註、篤守程朱之旨、嘗著下学編以教来学（深思して、經籍を解釈し、程朱の儒学を忠実に守っている。嘗て『下学編』を著して、後進の学者に教えている）」<sup>8</sup>、同じく七世の馬懋贊は「文辞秀茂。博涉群書、精探義理（文章は秀逸である。群書を博覧し、義理を深く追求する）」<sup>9</sup>、十世の馬源、馬潜兄弟は「独沈潜宋儒之訓（ただ宋儒の教えを深く考える）」<sup>10</sup>、十二世の馬翻飛は「所宗仰則在宋賢義理之説（尊重するのは宋の賢人の義理の説である）」<sup>11</sup>、十三世馬春生「服膺宋儒之訓（宋儒の教えを守り従う）」<sup>12</sup>、十六世の馬起升「尤服膺古韓歐朱王四家、韓欧文宗、朱王道統、詣極而互通（尤も、韓愈、歐陽修、朱熹、王守仁四人の教えを守り従っている。韓愈と歐陽修は文章の巨

匠であり、朱熹と王守仁は儒家の道統であり、それぞれ造詣が深く、互いに通じ合う<sup>13</sup>）、等等、祖先の宋儒の学に対する熱意を再三にわたって強調している。それは自らの宗族が代々にわたって守ってきた家学に対する誇りであり、子弟への教示ともとらえよう。

清代に入って、宋儒の「性理」の学と違って、經学、史学の研究において、諸事に根拠を求めて考証する漢学が流行り、特に乾嘉時代には最盛期を迎えた。漢学が流行して以来、「宋学」と「漢学」との衝突は絶え間なく続いた。清代最大の文学流派——桐城派はその文学理論と理学との緊密な関係から、常に「宋学」と「漢学」との争いに巻き込まれた。桐城派の「宋学」を擁護する立場は成立した当時から鮮明であった。桐城三祖の一人である姚鼐と漢学の領袖の戴震等との争論は「宋学」と「漢学」の争いの代表的な論争となっている。桐城派の始祖の方苞が古文の創作について、所謂「義法」説を打ち出した。「義」というのは「言有物」であり、文章の内容を指す言葉である。「法」というのは、「言有序」で、文章の形式を指す言葉である。その「義」と「法」の関係について方苞は「義以為経而法緯之（義は経であり、法はその緯である）<sup>14</sup>」と主張する。方苞の主張する「義」とは、実は宋儒の義理であり、つまり綱常の理である。よって、宋儒の義理は方苞の「義法」論及び桐城派の文学理論の中核をなしていると言えよう。漢学が流行する乾嘉時期も桐城馬氏宗族は宋儒の学を重んじる家風を守り、桐城派の文学理論と同調した。

桐城馬氏宗族が誇りにしているのが、単なる儒者ではなく、「文儒之彦」である。

「文儒」というのは、儒者の中に著述に従事する人のことである。後漢の王充は『論衡・書解』において「著作者為文儒、説経者為世儒（著作をする者は文儒であり、経書を解説する者は世儒である）<sup>15</sup>」と儒者を「文儒」と「世儒」の二つに分類した。そして経書の校訂と伝授に専念する世儒よりも、書を著し、説を立てる文儒を高く評価した。

勿論、世儒より、文儒における文学修養への要求が高い。馬氏宗族からは、文を以って名を成した「文儒之彦」が続々と頭角をあらわし、桐城の文壇を賑わせた。例えば、馬懋学の『下学篇』は東林党の領袖の高攀龍は「切近篤実、

近世所罕見（切実で充実で、近代まれに見るものである<sup>16</sup>）とまで絶賛している。馬懋徳は「為文探源経術、不蹈時趨（文章を作る度、経学の根源を突き止める、時代の風趣を踏襲しない）<sup>17</sup>」であるゆえ、「龍眠四子<sup>18</sup>」の一人として地元で名を馳せた。馬繼融は「文章淵雅、操履醇実。入成均、輒為呉祭酒偉業所拔、待以国士。冠蓋名流皆傾心結納、遂有盛名於時（文章は深遠で優雅であり、素行が純粹で誠実である。成均に入ると、すぐに呉偉業祭酒に抜擢され、国士とみなされた。官吏や名流達も皆心から彼と交際を結び、遂に盛名を馳せるようになった）」。馬方思は「有文名於時（当時において文名が高い）」、「時江南文社盛行、俱欲得公以為重（時に江南においては文社が盛んに活動している、皆先生を引き寄せて重鎮としたがる）」、「馬書思は「文誉冠一時（文名が時において天下に冠たり）」。馬潜は「作為文章直追有明諸賢（作った文章は明の諸大家に迫る）」、兄の馬源、従兄弟の姚孔鈞、姚孔鏞と一緒に「龍眠四子」と称され、時の翰林院掌院學士の韓葵に「洗尺繁蕪、獨存神骨（繁雜なところを洗い落とし、神韻と風骨だけが残る）<sup>21</sup>」と高く評価された。馬樸臣と馬蘇臣兄弟は文名高く、「有機雲之誉（陸機、陸雲に喩えられ、褒め称される）」。馬春田は「朱學士筠相国珪陸學士錫熊皆以文章相推重、声名甚藉（學士の朱筠と相国の朱珪、學士の陸錫熊は皆彼の文章を以って彼を推挙し重んじる、文名が甚だしく高い）<sup>22</sup>」。馬伯樂は「當時樹幟文壇」の「三伯樂」の一人として、注目を集めている。

以上は馬氏宗族の成員の文における成就の一部である。桐城派末期の代表者の一人、馬其昶は正にこのような家風のもとで育ったのであろう。

馬其昶（一八五五—一九三〇）、字は通伯、晩年は抱潤翁と号する。光緒年間は学部主事、京師大學堂教習の職を勤めていた。辛亥革命以降は、安徽高等學堂監督、政法學堂教務、（袁世凱）政府參政院參政を歴任し、民國五年（西曆一九一六年）に清史館總纂に就任、儒林、文苑及び光宣大臣傳の部分を担当した。著作には、『抱潤軒文集』、『屈賦微』などがある。

前文でも記したが、馬其昶は父の馬起升について、「詩古文義法守郷先輩方姚之緒論（詩と古文の義法は同郷の先輩の方苞と姚鼐の理論を守る）」、「尤服膺古韓歐朱王四家、韓歐文宗、朱王道統、詣極而互通。有載道集十二卷（尤も、韓愈、歐陽修、朱熹、王守仁四人の教えを守り従っている。韓愈と歐陽修は文章の巨匠であり、朱熹と王守仁は儒家の道統であり、それぞれ造詣が深く、互いに通じ合う。載道集十二巻がある）」と父の墓誌に記した。馬其昶は幼いころから父親について古文を学び、大きくなると、桐城古文の大家の方宗誠、吳汝綸の下で本格的に修業を積み重ねた。三十一歳の時、若き馬其昶は『桐城古文集略』を編纂し、一挙に名を上げた。馬其昶は『桐城古文集略』の序文に、姚鼐の『古文辭類纂』を「刊偽砭俗、啓示途徑（偽りを取り除き、低俗なものを批判し、正しい道を啓示する）」と賞賛し、自らそれを受継ぐことを志した。馬其昶はこの序文に「必其理高而辭尤雅者（必ずその理が高く、字句の尤も高雅な者である）」と選定の規準を明確にし、桐城派の理論を忠実に守り、後学に「考論文章體勢之正變、学派之流別（文体・文勢の正と変、学派の流派を論考する）」ことを望んだ。『桐城古文集略』は清初からの桐城の三十五家の古文を選出し、分類して、十二巻にまとめた。『桐城古文集略』は、単なる郷土文献の収集と整理だけでなく、文学流派としての桐城派を意識して編集した集大成の本であり、同時に当時既に衰微の道を辿り始めていた桐城派の再興を願った作品でもあろう。しかし、馬其昶等末期の桐城派の文人の努力も空しく、やがて桐城派文論の中心となる程朱理学と古文の形式が新しい時代に適応しなくなるとつれて、桐城派は歴史の舞台からだんだんと姿を消した。桐城の文壇を舞台として、馬氏宗族の成員は代々華々しい活躍を見せ、彼らの活動は、桐城派の清朝における繁栄に大きく貢献した。馬氏宗族の文壇での活躍を支えているのが、馬氏宗族の家学である。儒（特に宋儒の学）と文を重視する馬氏宗族の家学は、家庭教育（所謂「庭訓」）や家風の薰陶などを通じて子弟の学問並びに文学趣向に影響を与え、優れた「文儒の彦」を立て続けに育て上げた。家学の形成と世代間の継承は宗族文化の世代間の伝承を可能にし、宗族文化の持続的な発展に重要な役割を担う。科挙で「簪纓世族」となっても、家学の伝承による宗族文化の



蓄積と発展がなければ、文化宗族とは到底言えない。

#### 四 『桐城馬氏詩抄』

家学以外、文化宗族の形成と発展には、家集が果たしている役割も看過できない。

道光十六年（西暦一八三六年）に、歴代の桐城馬氏の宗族成員の詩作を集めた大規模な宗族の詩集——『桐城馬氏詩抄』<sup>29)</sup>が刊行され、注目を集めた。『桐城馬氏詩抄』は第十五世の馬樹華によつて編纂されたもので、全部で七十巻があり、宗族の閨閣詩人三人を含め、歴代計四十九人の詩集を集めた。加えて巻末の単篇の作品の二十三人の作者を加算すると、全部で七十二人にもほり、収録した詩作は四千三百二十六首にも及んだ。清代中期の道光十六年までに前掲の数字にまで膨れ上がり、桐城馬氏宗族の詩人の層の厚さや宗族成員の詩歌創作へ注いだ情熱がこれらの数字にはつきりと表れている。

『桐城馬氏詩抄』は「怡園六子」の馬懋功の『介石齋稿』を肇とする。前文に紹介したように、馬懋功は南明に仕え、清軍との戦いに命を捧げた人物である。彼の詩の多くは戦火によつて散逸してしまい、残ったのは崇禎帝以来の作品三十五首である。故国への憂愁、時局への憤激、報国の悲願等が交差し、詩全体に沈鬱悲壯の美が漂う、姚椿の跋文に彼の詩について「沈雄有杜氣（深沈で雄壯、杜詩の気品がある）」<sup>30)</sup>と褒め称えた。馬懋功の詩を開巻に掲げたことは編者の意識的な挙動であろう。

馬懋功と殆ど同じ時期に活躍した「怡園六子」は、詩文酒会などにおいて詩の創作活動を盛んに行い、詩名も四方に鳴り響くようになった。しかし、馬之瑛の『稊莊詩集』以外、そのほかの五人の作品の多くは、明末の混乱期において散逸してしまった。『桐城馬氏詩抄』に収録した馬之瑛の詩作は九百五十四首になる。しかし方東樹の跋文によると、馬之瑛の生涯の作品は実に一万首に近い。この数字は筆者に陸遊と查慎行のことを連想させる。何れも一万首

に近い詩作を誇る詩人で、詩の創作を生涯にわたって絶えず続けて、詩人として盛名を極めた。馬之瑛は詩名において陸遊、查慎行には及ばないが、詩に注いだ熱意は変わらない。『秣莊詩集』に収録した詩作は、題材が豊富で、特に民生を見つめる「避賊行」「官馬行」などの作品は、杜甫の「石壕吏」を想起させる。馬之瑛の詩の風格は全体的に素朴で平淡に見えるが、「運意鍊詞、俱從少陵門徑中來（詩の着想と単語を考え練る方法は全て杜甫から来ている）」と朱雅は跋文で高く評価している。

馬之瑛の文学趣向は六人の息子（馬敬思、馬孝思、馬繼融、馬教思、馬日思、馬方思）に大きく影響を及ぼした。『晚晴簃詩匯』の詩話にこのような記録がある：「一公為正誼長子、承過庭之訓、致力於詩（一公は正誼の長子であり、父親の教えを承り、詩に力を注いでいる）。「一公」は長男の馬敬思の字で、「正誼」は馬之瑛の字である。「過庭之訓」というのは、父親の教育を指す言葉である。『龍眠風雅』に馬孝思について、「兄弟有六、皆工詩、玉友金昆、照耀寰海（兄弟六人がいて、皆詩に長けている。ご兄弟は金や玉のように輝き、天下を照らす）」と六人の詩才を高く評価した。馬教思兄弟は父親から詩について教えてもらい、又、詩の創作に情熱を注ぐ。六人は共に詩名が高く、それぞれ詩集がある。特に長男の馬教思と三男の馬繼融は、「詩尤盛、一本其先世之淵源（詩が尤も盛んであって、皆祖先の淵源を辿っている）」との評価がある。馬教思の息子の馬云、馬旭もまた詩名が広く知られ、それぞれ詩集がある。十一世の中で、詩を以って名を広く知られる宗族詩人も多く、例えば、馬樸臣、馬蘇臣、馬枚臣、馬相臣等人の作品は『晚晴簃詩匯』に収められている。特に馬樸臣について、族譜にはこのような記録が残っている：「遊學吳越、與諸名流往還唱和。每有所作、流播浙東西之口。一時騷壇咸推重之（吳越で遊学している時、諸名流と交遊し、唱和した。作品ができるたび、浙東浙西の口々に伝播されて、一時詩壇において皆彼を重視して高く評価した）」。

『桐城馬氏詩抄』に女性詩人三人の作品集も収録されている。馬方思の妻の姚氏の『凝暉齋集存』、馬占鰲の妻の姚德耀の『清香閣詩抄』と姚尊甫に嫁いだ馬氏の『灸窓閑咏』。家集に女性詩人の詩集を収めることは、女性の創作へ

の寛容、乃至は支持の態度を物語っている。

『桐城馬氏詩抄』の跋文に、編集者の馬樹華の編纂にいたる経緯が記載されている：

吾家自四世祖肇興文学、六世祖太僕府君為時名臣、一門群從、彬彬匯起、七世八世間遂有怡園六子、而八世伯祖兵部府君稭莊集、尤為鉅制、自是風雅代不乏人。顧万曆以前、閱世久遠、既缺有間。六子遺稿散佚過半。厥後儒素相承、著書滿家、付梓者甚少。流傳未幾、或佚或存、其存者、又或殘缺不完。樹華慨然、懼其久而愈湮也。爰有志輯、自嘉慶己巳至今丙申垂三十年、乃取所得、謹加選定、編次成帙。曩同歲生丹陽劉時庵嘗言其鄉先輩風尚為詩者、皆不亟授梓。作者雖多、類弗著於世。故竹垞明詩綜僅列姜仲文陸明允兩家、歸愚別裁集至未列一人。時庵因手輯曲阿詩綜、以發其藏。茲吾一家之詩、固未足方彼一邑數百千年之美富、而蒐羅放失、雅有可觀。乃明詩綜錄吾邑二十余人、吾家闕如。別裁集亦僅載相如先生三詩、幽隱弗宣、若合一轍、豈不以先世類多厚重、不急務名譽而然耶？

吾が一族は四世祖から文学によって家を興し、六世祖の太僕府君（馬孟禎）は当時の名臣である。一族が追随し、濟濟たる人材を輩出し、七世八世では遂に怡園六子が現れ、八世の伯祖の兵部府君（馬之璞）の『稭莊集』は尤も大作である。そこからは風雅の道を志す者が代々続く。思うに、万曆以前の作品は時代が大分経つたため、既に長いこと欠けてしまった。六子の遺稿は大半が散逸してしまった。その後は代々儒学を受け継ぎ、著作は家中にあったが、上梓するものは甚だしく少ない。伝播して間もなく散逸したりすることもある。その残つたものも、欠落があつたりして不完全になることがある。樹華は感慨深い、それらの書籍は時間が経つにつれてなくなること懼れるからである。それで編集することを志し、嘉慶己巳（西曆一八〇九年）から今日丙申（西曆一八三六年）まで既に三十年近くなつた。そこで採集したもの慎重に選定し、編次して、書物として完成させた。昔僕と同時に孝

廉になった丹陽の劉時庵は嘗て僕に言った、彼の故郷の先輩で詩の創作を好む者は、作品を刊行することを急ぐとしなかった。作者は多くても、凡そ世では無名である。故に朱彝尊の『明詩綜』では姜仲文と陸明允の二人しか名を列ねなかった。沈德潜の『国朝詩別裁集』に一人も名を列ねられなかった。そのとき時庵は手ずから『曲阿詩綜』を編集することによって詩の蔵を開こうとする。吾が一族の詩は、もとより彼の一県の数百年の作品に匹敵することはない。しかし散逸したものを集めれば、なかなかたいしたもののである。『明詩綜』は吾が県から二十人余を収録したが、吾が一族からは一人も入っていない。『国朝詩別裁集』にも相如先生（馬樸臣）の詩三首しか載っていない。世に知られず埋もれていくことは、皆同じである。それは先祖達がだよそ篤実で、名誉を求めることに執着しなかったからであろうか。

馬樹華は長い歳月をかけて宗族成員の作品を集めて家集として刊行する尤も重要な理由は勿論宗族文献の保存である。宗族成員の個人の作品を宗族の人力と財力で出版保存することによって、散逸や欠落の恐れから免れること、また、祖先の文字を子孫に残し、その教えを代々伝えることは子孫としての責任を感じたのであろう。

この跋文からもう一つのことに分かる。馬樹華は家集を一宗族の文学（文化）の統一体としての影響力に注目し、家集の編集によって、宗族内部に向けただけでなく、宗族の文学（文化）を外部に発信することを強く意識している。その点において、家集の編纂は実に『曲阿詩綜』のような地方詩文総集の編纂が持つ意義と相似していると馬樹華は語る。実際にはどうであろう。『明詩綜』と『国朝詩別裁集』に一人しか収録されなかった馬氏宗族からは、民国に編纂された『晚晴簃詩匯』に三十二人の作品が収録され、地方の文学世家として十分な実力を見せた。それは、馬樹華の『桐城馬氏詩抄』のおかげであるかもしれない。

明以来、特に清代には、『桐城馬氏詩抄』のような大規模な家集が多く作られた。例えば、同じ桐城の望族——桂

林方氏にも、一族およそ百人以上の詩人の作品を集めた総集がある。このような大規模な宗族文学の総集（家集）の編纂事業を支えているのは、宋以来、特に明清時代に大きく発展した近世の宗族制である。

家系記録としての族譜を編纂することは、明、特に清代における南方地域の宗族にしては既に普遍的に行われることである。祠堂の設立、族譜の編纂、族産の設置などの宗族行事は宗族の結合を強め、宗族システムを維持していくには、極めて大きい役割を担うことは既に多くの研究者に指摘され、井上徹氏は『中国の宗族と国家の礼制——宗法主義の視点からの分析——』において祠堂、族譜、族産などを「一連の装置」<sup>31</sup>と称する。実際明と清の時代にこの「一連の装置」は既に多くの南方宗族に普及した。しかし、桐城馬氏宗族のような一部の文化宗族の宗族文献の編纂活動は族譜を作ることにとどまらなかった。宗族成員の詩、文総集の編纂によって、祖先の文字を子孫に残し、宗族の文学を宗族内部並びに外部に発信することによって、宗族成員に求心力を求め、文学で宗族を繁栄続けさせよう、とする意識は文学によって家を興した文化宗族に特に強いことであろう。家集の編纂は祠堂、族譜、族産など「一連の装置」の延長線にあり、宗族の結束を求める点では同じ性質を持つている。実際に、族譜の中に「傳芳集」とのコーナーを設けて、祖先の詩、文を収録する形も多く存在する。宗族が家集の持つ力を求める一方、家集の編纂と刻印に必要な資源を提供できるのも、宗族の力によっている。

祠堂、族譜、族産などと比べて、家集の編纂と刻印はまだ一部の宗族に限られている。『桐城馬氏詩抄』の分析で分かったように、このような宗族成員の詩文作品の総集の編纂は宗族の文化宗族としての自覚を強く意識していることを示している。編纂と刻印事業によって、宗族文化を宗族内外に同時に発信する。宗族内部には、文化による求心力を求め、宗族外部にむけては、宗族の文化成就を一つの統一体として宣伝して、文化宗族の社会地位を固める。筆者はこのような家集の編纂と出版事業の有無が文化宗族としての自覚があるか否やを示す重要な指標になると考える。

## 五 馬氏宗族と方氏・姚氏宗族

桐城文化を語るには、桐城（桂林）方氏宗族と（麻溪）姚氏宗族を避けては通れない。明初、（桂林）方氏宗族と（麻溪）姚氏宗族が他に先んじて隆盛し、桐城文化の振興の序幕を開けた。（桂林）方氏宗族は宋末元初桐城に移し、七世の方佑が天順元年（西暦一四五七年）に進士に合格して以来、万暦年間、方大鉉、方大美、方大鎮、方大任、方孔昭等が相次いで進士になり、科挙において隆盛を極めた。明清の政權交替に際して、方氏宗族の多くの族人は清王朝に非協力的な態度を貫いた。「明末四公子」のひとりとして天下に名を馳せた方以智はその中の一人である。清王朝に方氏宗族は順治十四年（西暦一六五七年）の丁酉科場案と戴名世の『南山集』案によって大きな打撃を受けた。方苞も『南山集』案で死罪に問われたが、李光地の助けにより、死罪を免れ、後に桐城古文の義法理論を確立、桐城派の始祖と称された。桐城方氏は方大漸から易学を家学として七代続けて研究し、その成果を集めた家集は『桐城方氏七代遺書』と言う。又、外に、宗族の百人以上の詩人の詩作を集めた詩集総集もある。一方、姚氏宗族は元末浙江省の余姚から移ってきた。景泰二年（西暦一四五一年）に五世の姚旭が進士になり、それからは姚之驥、姚之蘭、姚孫棐、姚文然、姚文燮、姚文熊等が相次いで進士になり、多くの「循吏」を輩出した。乾隆年間、十六世の姚鼐が義理、考拠、詞章を掲げ、桐城派の集大成者として、桐城派の発展に大きく貢献し、桐城派三祖の一人と目される。以降は宗族の子弟は皆桐城家法を守り、とりわけ十八世の姚鼐、その孫の姚永樸は桐城派の大家として文名が高い。

馬氏宗族と方氏、姚氏宗族は姻戚関係にあり、特に姚氏とは代々婚姻関係を重ねる関係で大変関係が緊密である。その姻戚関係を背景にできた師弟関係は馬氏宗族の宗族文化の発展に繋がる。例えば、馬教思は岳父の方以智について詩を教わり、方以智に「奇才」と目された。一方、馬教思の三人の娘はそれぞれ方氏、姚氏、趙氏に嫁がせた、娘婿とその兄弟たちは馬教思の門下に入り、教えを受けていた。例えば、馬宗璉は母の兄弟の姚鼐について詩文を学び、名を天下に広げた。又、宗族の姻戚関係を背景に宗族間の文学交遊も頻繁に行い、代々婚姻関係にある姚氏との文学

交流は数百年にわたり盛んに行われ、文学史においても稀に見る現象である。

方氏、姚氏及び他の文化宗族との婚姻関係は、馬氏宗族の子弟に優れた教育資源と文化環境を齎す。又、ほかの文化宗族との繋がりにより、馬氏宗族の地方における文化的影響力も強くなる。

実際、桐城の各文化宗族の間で姻戚関係による繋がりはもつと複雑で、各文化宗族は皆一つの大きなネットワークを形成していると言っても過言ではない。桐城派の師友淵源についてはもう既に研究は実ったが、その宗族間のネットワークについての研究も興味深い発見に繋がるであろう。

## 結語

桐城馬氏宗族は明の中葉から科挙によって隆盛し、桐城の地域文化の発展とともに、宋儒の学を尊び、文を重んじる家風を形成し、長き世代にわたり多くの古文の大家を育て上げ、地方の文化宗族として聳え立つ存在になった。馬氏宗族の文化宗族としての自覚意識は宗族の詩人の作品を集めた総集の編纂事業に特に強く現れた。宗族全体の文化的成果を一つの統一体と看做し、それを編集刻印することによって、宗族内部にむけて文化による求心力を求め、外部に向けては宗族文化の発信によって、文化宗族としての社会的地位を強く求める。桐城には、優れた人材を輩出した文化宗族は他にも幾つかある。その中に馬氏宗族は桐城方氏、桐城姚氏、桐城張氏、桐城左氏と並び「五大世家」と呼ばれている。文化宗族の間では、婚姻関係を背景に展開している師友交遊はとても頻繁であり、しかも数代数世代にわたって続いた。それらの文化宗族間の師友交遊は文化宗族の発展だけでなく、桐城の地域文化にも大きな影響を及ぼしているに違いない。今回の論文は馬氏宗族だけに焦点を絞って考察を試みたが、それを基礎に桐城の文化宗族の全貌及び桐城文化との関係についての研究は今後、展望したいと思っている。

(註)

- (1) 『桐城扶風馬氏族譜』(馬其昶、民国十八年桐城扶風馬氏排印本) 卷首の三。
- (2) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首の三。
- (3) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首の三。
- (4) 『明史』(中華書局、一九七四年) 卷二三〇。
- (5) 馬之瑛、字は倩若、号は正誼。崇禎十三年進士に合格して、陽江知県となる。明が滅びた後、清朝に仕え、兵部主事の官職にまで昇進した。
- (6) 『桐城耆旧傳』(馬其昶、中華書局統修四庫全書叢書第五四七冊) 卷二
- (7) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之三。
- (8) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之三。
- (9) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之三。
- (10) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之四。
- (11) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之四。
- (12) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之四。
- (13) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之六。
- (14) 『望溪文集』(方苞、抗希堂十六種叢書) 卷二
- (15) 『論衡』(王充、叢書集成初編第二〇六帙) 卷二十八。
- (16) 『桐城統修原志』(道光十四年刊本) 卷十四
- (17) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之三。
- (18) 龍眠、桐城の古称。
- (19) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之三。



- (20) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之三。
- (21) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之四。
- (22) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之四。
- (23) 『桐城古文集略序』(馬其昶『抱潤軒文集』 卷三、続修四庫全書第一五七五冊)。
- (24) 『桐城馬氏詩抄』、道光十六年刊本。
- (25) 『介石齋稿』(『桐城馬氏詩抄』) 小傳。
- (26) 『秫莊詩集』(『桐城馬氏詩抄』) 小傳。
- (27) 『晚晴簃詩匯』(徐世昌、続修四庫全書第一六二九―一六三三冊) 卷四十
- (28) 『屏山詩草』(『桐城馬氏詩抄』) 小傳。
- (29) 『菜香園集』(『桐城馬氏詩抄』) 小傳。
- (30) 『桐城扶風馬氏族譜』 卷首之四。
- (31) 『中国の宗族と国家の礼制——宗法主義の視点からの分析——』(井上徹、研文出版、二〇〇〇年) 十一ページ。